

人間誰しも、全く同じ人間なんてこの世には存在しない。同じ目、同じ口、同じ鼻、同じ耳、同じ手足、同じ顔…どれをとってもみんな違う。似ているようで、みんな違う。それが生き物というものでしょう。見える部分でさえ、少しずつ違って全く違うものなのだから、ましてや目に見えない、考え方や、心の持ちよう、感じ方等々、それこそ違うものです。だからこそ人間関係は難しく、また、素晴らしいものなのでしょうね。

私達は皆、生まれ持った素晴らしい何かを、個々に持ち得て生まれきたように思いますが。そんな私達だから、意見のすれ違いもあり、そして喧嘩もし、人を嫌いになることがあります。しかし、そのすれ違いも、『思いやり』という心で、お互いがお互いを労り合う事で、逆にその人を愛することも出来るのではないのでしょうか。

私達は「言葉」という道具を使って、自分の思いを相手に伝える能力を持っています。

「1つの言葉で喧嘩して、1つの言葉に励まされ、1つの言葉に涙する。」

その1つ1つの言葉には、発する人の心が込められています。その心の中に、その人を『思いやる心』が込められているか否か？そこに、相手を受け取る心境の違いが生まれてきます。だからこそ、言葉は慎重に、そして一度吐いた言葉は、もう二度と呑み込むことは出来ません。『言葉』と申しますが、口から出たその言葉は、その発した人の心を乗せて相手に届けられます。例えば、「ありがとう」という感謝の言葉。字面だけ読めば、確かに感謝の言葉以外の何ものでもないのですが、仮に、口先だけの「ありがとう」では、感謝の気持ちとして、相手に伝わる事はないでしょう。むしろ嫌味に聞こえるかもしれない。言葉という便利な道具を持ち得ている私達なのですが、便利な分、扱いにくい道具でもあります。世の中の様々なことも同じです。便利になればなるほど、生きる事が難しくなってきたのを実感します。そう考えると便利になるほど、忘れてはいけない「心」という存在がポイントになってくるように思います。

『目は口ほどにもを言つ』と申します。言葉を発しなければ、私達は空気を読むしかありません。『空気を読む』とは若者言葉ですが、いわゆる、「この人は今どういう心境で、何を考えているのか？相手の立場に立って、物事を考え行動する事です。その空気を読む時、一番のポイントになるのが、やはり相手の「目」ではないでしょうか？相手の目を見れば、何を言いたいのか？どうして欲しいのか？何となく感じるものです。

例えば、数十年連れ添った夫婦なら、言葉に出さなくても目を見れば、アッ新聞が欲しいのかな？灰皿が欲しいのかな？とか、長年の習慣で空気を読むことも出来ると思います。『習慣こそ第2の天性』と申しますが、習慣になるまで一朝一夕では成りません。習慣化するまでにはやはり、相手への「思いやりの心」を持って忍耐することが不可欠でしょう。毎日毎日、倦まず弛まず相手のことを思いやって行動していれば、自ずと相手の心境も手に取るように分かってくるというものです。言葉も交わさず、相手の目を見て空気を読み、その人が欲している行動をとる。お互いに、少しでも分かり合えるように努力することは大切なことでしょう。しかし、空気を完璧に読むことが出来る人は世の中には存在しないでしょう。どんな素晴らしい人でも完璧な人間なんていないものです。もし仮に出来たとしたら、その人は菩薩様・仏様と言えるでしょう。普通は、「その様にありたい」と念じて、人の事よりも、まず自分です。これが一般的です。ただ、「いつも何時も自分のこ

とで精一杯、自分さえ良ければそれでよし」なんて心境に陥ってしまったては言語道断ですね。少なくとも、自分は周囲の人に助けられて生かされている事を忘れてはいけません。大事なものを忘れないためにも『思いやりの心』が必要不可欠なのです。

一枚の葉っぱにも、表があれば裏もあります。昼間はサンサンと降り注ぐ太陽のエネルギーを葉っぱの表面で吸収したかと思うと、夜には葉っぱの裏面から酸素を放出します。同じ一枚の葉っぱなのですが、吸収もし、また放出もする。葉っぱ自身は、周囲に溶け込み、生かされていることを知っているかの如く、二面性が上手に成り立っています。その様に物事には、表があれば裏もあるものです。生かしもし、生かされるのです。

人間の表と裏という事になれば、「個性」という特異な性質が大きく関わってきます。

「個性」は、時と場合によって、生き生きと自分を生かしてくれる時もあるれば、その「個性」が邪魔をして、周囲に理解されず、迷惑がられる時もあります。相手のためと思つて行動したことが、正反対に受け取られ、怨み節を言われることもあります。「個性」には『**長所もあれば短所もある**』という事です。

「なぜ？どうして？そんなつもりはなかったのに…」と悔やんでも、あとの祭りです。ではどうしてその様に不本意な事が起きてしまうのでしょうか？それは周囲にいる他人よりも、『自分に比重を置いて考えている』からではないでしょうか？

私達は、目の前の出来事を出来事としてだけ捉える習性があります。例えば、車を運転している時、横から猛スピードで駆け抜けていく車とすれ違ったとしましょう。おまけに、その車を運転していた運転手が顔を出して「どこ見て運転してんだ！謝れ！」と頭ごなしに怒鳴られたら皆さんどうしますか？素直に謝れますか？誰が聞いても腑に落ちませんよね。仮に口では「すみません」なんて謝ったとしても、何で私が謝らなければいけないの？どう考えてもあっちの方が悪いだろ…今日は本当に運が悪いなあ…等と。憎まれ愚痴や、言い訳ばかりが心の中を支配してしまいます。仮にこれが私達『人間の眼』だとしたら、もう一つ『仏の眼』というものもあるような気がします。『仏の眼』とは、たとえ何か不運なことに見舞われたとしても、それがどうして起きたのか？自分のどこがいけなかったのか？今後何かに気を付けなさいというお知らせなのかもしれない。仏様は、周囲の人の口を借りて「どこ見て運転してんだ。謝れ！」と、私に聞かせることで、もっと運転を気を付けなさいよと、他にもっと大事な何かを知らせて下さっているのではないか？自分の行動を少し反省してみようかな？確かに不注意な部分もあるかもしれない。そつだ気を付けよう。『有り難う御座いました』と、そう考えることが出来ただけでも、実は有り難いことなのかも知れません。その様な出来事により、自分自身を振り返る事で『思いやりの心』から出る、感謝の心を忘れないように計らって頂いているのかもしれない。こういう『仏の眼』を持つことが出来れば、周囲の空気を読む事も出来るようになるでしょう。そして大抵のことには動じず、何もかもが有り難い事として、捉えることが出来る様になるはずです。自分がこの世で生きている意味も考える様になるかもしれません。

完璧な人間はいません。だからお互いに助け合つて生きていかねばならないのです。苦しい思いを経験して、人間が磨かれていくのです。気が付きましょう。気が付けるような自分を目指しましょう。死ぬまで勉強というのは、そういう事なのではないでしょうか？『思いやりの心』で共に生きていく喜びを感じ合える事が出来れば、素晴らしい世界を実現できるのではないのでしょうか？自分のために…まずは自分から…。

副住職谷川寛敬